

製鉄の変遷

鉄の製錬技術は、アナトリア（現在のトルコ）を起源とし、中国、朝鮮半島を経て、6 世紀後半には日本に伝わった。考古学的な遺跡から、日本における最古の製鉄は鉄鉱石を用いたものであったことが判明しているしかし、この地域には利用しやすい鉄鉱石の鉱床が乏しかったため、すぐに自然に豊富にある砂鉄を利用する製法に変更された。

古代のたたら

初期のたたら炉は屋外に作られ、動物の皮で作られたふいごで動力を得ていた。西日本における鉄の生産は、もともと瀬戸内海周辺に集中していたが、11 世紀から 13 世紀のいずれかの時に山陰地方（島根県、鳥取県）の山間部に中心が移った。

近代のたたら

その後何世紀にもわたって全国で人口が増加し、農具、生活用具や武器を作るための鉄の需要が産まれた。この需要を満たすために、たたら炉はますます大きくなり、より強力な足踏み式ふいごが導入された。これらの進歩は、最終的に 18 世紀から 19 世紀にかけてのたたら製鉄の最盛期をもたらした。

現代のたたら

西洋の反射炉は 19 世紀後半に輸入され、製錬業界に革命をもたらせた。既存の伝統的な製鉄所は競争に苦戦し、技術者たちは、既存の製法を角炉と呼ばれるレンガ炉に適応させようとした。この転換により、たたら製鉄は終焉を迎えた。1920 年代初頭までに、最後のたたら炉が引退した。